

個々の子ども・青年に対するチーム・ケアと発達を促す体験の保障、
そして本人の納得と選択を待つ

内島 貞雄

はじめに

今年度の参加者は小中高関係者が各数名で全体で20名弱であった。最初に昨年度のまとめを執筆した飛田登美夫さんから昨年の報告と議論について報告があり、そしてこの何年か継続してきた次の4つの検討課題を継続していこうと述べられた。①福祉的な視点を含んで実践を展開する。②自分の人生、今後の社会に対する子どもたちの根源的な問いを大切にする。③学力の基礎の形成や定着を図るさいに、子どもたちとの関係づくりと切り離さないで取り組む。④教育政策や教育行政の動きを批判的にとらえ、個々の子どもが力を発揮できる場を保障する。(一部、表現を変えた)

これらを踏まえ、今年度は貧困対策を含めチームで取り組むことの大切さと本人の納得と選択を大事にする必要性が深められたと思う。

I 小学校の実践

【報告1】 檜山・A小学校 金本 繭さん(仮名)「A君との3年間の関わり」

初めての複式校での経験で2011年度に3・4年生各3名を受け持った。3年生A君と4年生のB君が発達課題を抱えていた。A君の3・4年生と一年空けた14年度の6年生時の3年間の関わりの報告であった。A君は多動で集中力がなく、こだわりが強く、新しいやり方を受け入れられない。B君は反抗的で態度が悪い。注意すると逆ギレする。

メモによるA君の8、9月の様子ではちょっとしたことで荒れたり、いらいらしたりしている。8月末には保護者に電話で面談の相談をした。その時に母親から「うちの子ばかり怒られていると聞くけど、そんなにうちの子悪い？」と言われる。

9月中旬に教頭も交えて面談する。資料として①A君の頑張っている所・良い所 ②学習面での課題 ③伸ばしたい力と今後の方向性、を示した。そして専門の方に相談して取り組んだ方が良いことを伝えた。

保護者が受けとめてくれて、11月にパートナーティーチャーに来てもらい、ADHDとLDの可能性があると指摘を受け、アドバイスも受けた。

A君が4年生になった2年目、下の学年が女子3名で関係が悪く4年生の女子Dもそれに疲れてどろどろした状態だったという。A君に対しては少しずつ特別支援的アプローチをしていたが、特に1学期は学習面について毎日のように叱っていた。学習発表会での頑張りや、児童会書記になったりして、学習面以外では良い所が見え方向性ははっきりして

きた。現在6年生になった女子3名からは「その頃の先生は、怒ってばかりで嫌いだった」と言われたという。

13年度は担任をしていなかったが、B君と一緒にトラブルは多く見られ、5年生の学習にはついていけない様子であった。翌年再度受け持った時にはA君は思春期を迎え大人っぽくなっていた。ADHD・LD的傾向があるととらえて対応した。具体的には、おおらかに接し一貫した対応をし、注意したときに理由を説明する、頭ごなしに叱責しない、状況の整理をしてから冷静に個人的に注意・指導をする、みんなの前で積極的にほめる、等である。

9月の実態交流の資料では、以下のようにまとめられている。学習への意欲が少し出てきて、宿題や家庭学習にも取り組むようになる。漢字のミニテスト等、学習して直ぐだと結果が出る。字がだいぶきれいになる。運動会などで下学年に気を配りながら6年生として頑張ることができた。一方で、話を聞き取れない、集中力が途切れる、日によって気分がむらがある、思春期のせいか素直でなくなった面もある、等の課題があると。

このように、接し方を変えることで学級の雰囲気明るくなり、5年生女子との関係も好転してきたという。特別支援的なアプローチは他の子どもたちにも有効であると述べられているが、これは多くの方から指摘されていることでもある。

パートナーティーチャーとも時々話し合い、アドバイスを受けてできる範囲で取り入れている。多忙の中で他の先生方への報告が不十分であった点も反省点としてあげられている。

思春期の課題にも対応するため、金本さんは等身大の自分のことを話すようにした。9月の参観日の道徳の時間には、自分の人生の歩みを伝え、子どもたちもこれまでの歩みを振り返り、それぞれの未来像をイメージするという授業をした。A君は「先生が先生になってうれしかった」と書いてくれた。

他の先生から、学級の男女の身体的接触が多く心配だと指摘されていたことと、A君がしつこく「何で子どもいないの？」と聞いてくるので、3学期に命の誕生をテーマに「生まれてきた命と生まれてこれなかった命の話」をする。女子は号泣し、A君は静かに聞いていて感想に「俺たちを自分の子どもと思って下さい」と書いた。

保護者の母親とはいろいろな機会に彼の成長や課題についてはこまめに話せた。父親は普段は道外で働いているが家庭訪問や学級キャンプの時に話すことができ、希望を受けて2月の参観日にも来てもらった。

卒業式の前日に、6年生ひとりひとりと面談をした。その時にA君は「先生、そのままです」という言葉を残した。彼は中学生になり、今でも会えば悩みも含めて自分のことを話してくれる。お母さんも彼や学校への心配を話す。

発達障害が疑われる子どもとの接し方の資料は参考になるが、これらはテクニックではない。大切なのは、その子やその家族の思いにどれだけ寄り添えるかだと痛感した3年間だったとまとめられた。

【報告2】道東のB小学校 響 太さん（仮名）

「泣きじゃくる凜子」と「赤くただれたユメ雄」

－子どもの貧困状況の中、教育現場でやるべきこと・やれることは？－

今の子どもたちは持ち物、身なり、外食もしていることなど一見「貧困」に見えないことが多い。しかし街の中や公共施設などで困った親子の姿が目につく。走り回ったり、うろろうろしたり落ち着かない子ども。親は大声でどやしつけたり、平手や拳固がとぶ、注意しない、無視する、子どもにかまわずスマホに集中する、スタッフにため口で話し些細なことで突っかかるなど。そして親子の服装がちぐはぐだったり、子どもが初対面でも大人に妙になれなれしい。

これらは貧困を背景とした親と子の姿に見える。そうした保護者は生活に余裕がなく、自分のことで精一杯で食事や家事に気を配れない。しかし他方では周囲にそう思われたくない、豪華な生活に見せたいなどの様子が感じられるという。そしてヘルプが出せない。こうした状況の中で何ができるのかを探るレポートである。

1. 凜子と学級の子どもたち

子どもと保護者の階層性があり、それを乗り越えて子どもたちのつながりをつくる実践の試みである。

小学校2年生の凜子はある日「もう、学校やめる」と言ってランドセルを持って玄関を出た。何人かの子と一緒に後を追ひ「みんな心配しているんだよ」と抱きあげた。暴れて抵抗するのかなとの予想に反して抱かれたままであった。本心は「抱きしめてほしい」「受けとめてほしい」なのかなと響さんは感じとる。

凜子は父母と4人きょうだい。母親は病気で通院している。他の母親たちからよく思われていない。母親はブランド物のバッグを持っている。凜子は長女で家事も手伝い、一番下の弟の世話もしている。学力が低く、思い通りにいかないとすねて泣きじゃくる。自分の思いが先行し友達（特に恵や江里菜）とトラブルをおこす。3人とも「満たされない思い」「強い自己中心性」「不安感」があると感じられるという。

1学期からことあるごとに3人での喧嘩があり、特別支援担当の先生が入って話し合いをする場面がたくさんあった。2学期には「机をのぞいたと言われた」などの些細なことで毎日のように幼児のように泣きじゃくる姿があった。授業中も問題の解き方やノートへの書き方が分からなくなったりすると泣いて机の下に潜った。

2年生になるときに40名を越えたが、特別支援学級在籍者が4名いたため1クラス扱いになってしまったのである。女子は固定された仲良し（「できる子」と友達づくりが進まない子に分かれ、親の仲良しグループの影響が強く見られる。

こうした状況を打開するために「係活動」に力を入れた。やりたい係で自主性や創造性を発揮させ達成感や自己肯定感を育てることと友達関係づくりをすすめることをねらいとし

た。1学期の経験を経て、2学期になり凜子はいつもの仲良しと誘い合うようにして「図書係」に入った。隔週水曜日に図書館バスから自分たちで紙芝居も借りてくるようになり学級の子どもたちも食い入るようにつめて楽しんでいる。凜子は両手一杯の図書を抱えてバスに向かう。図書コーナーの本の整理についても、凜子が率先して教室の前に出て皆によびかけるなど活発に活動した。

12月からは「飾りがかり」として「くじ引き遊び」の発案などを行った。3学期には担任から「音楽発表会」をするための班を提案した。この頃にはこれまでの仲良しグループではなく、いろいろな子が混じった構成になった。凜子は鍵盤ハーモニカを担当し、班の歌でもみんなでサイドステップをしながら息を合わせて歌うことができた。

授業については凜子への配慮もあり、算数ではノートをやめて書き込み式のワークシートにした。また3人の学習グループをつくり答え合わせもそこで行った。凜子はグループのリーダーとなりグループへの配り物や「はじめるよ」という指示などにやり甲斐を感じているようであった。凜子が泣きじゃくることはなくなり、学習参加と学習理解が進んできた。

3年生になり、学級担任・学校と保護者で話し合い情緒学級に在籍することになり、医療機関を受診して薬の処方もなされた。パニックになることは減り、国語と算数は交流学級からの「取り出し」の指導となった。

2. ユメ雄とその母親

一人親家庭では「子育て」ではなく「孤育て」となりがちである。その子どもと母親を支え見守る実践の試みである。

ユメ雄は母と弟の3大家族である。朝は近所のケンジや上級生たちと誘い合って登校する。同じ地域内に祖父母の住む牧場がありそこに下校する。保育園との引き継ぎでは以下のことが伝えられた。

姿勢保持が苦手な話を聞くときも落ち着かず、聞き漏らすことが多い。緊張したり、不安があるとトイレに行きたくなる。こだわりが強い傾向がある。虫歯が多く上の歯がほとんど無い。就寝時無呼吸（アデノイド）がある。受診し薬はあるが服用が続かない。朝食を食べていないことがほとんど。ユメ雄の母とD児の母は同級生で仲良く交流している。ケンジの母とも仲がいい。

入学後の家庭状況では、母親は搾乳の手伝いで兄弟が起きる前に出かけている。昼間はコンビニの店員などをしている。母はよく怒るようだ。「ユメ雄の宿題見てると、ついつい怒っちゃうんだよね」と言っている。離婚した父親は隣町に住んでいて、学校行事に参加したりしており、長期休業中などにユメ雄が父親の所に遊びに行く。

ユメ雄の状況は教職員に共有されており、特に朝食抜きの問題を何とかしたいと生活チェックなどの親全体の問題として取り組むことも検討された。

入学後の4、5月頃「やらない」「い〜い（首を横に振る）」と言うユメ雄が気になっ

た。授業の合間に椅子に座って子どもを膝に乗せて揺らす「宇宙船遊び」にも乗ってこない。国語の時間の発表でもユメ雄だけ手が挙がらない。自分を安心して表現したり、受けとめてもらったりした経験が少なく、他者と応答し合う関係が薄かったからではないかと考えた。

また、友達にちょっかいを出したり、授業中に「ねえ、まだ終わらないの～」と言ったりする。響さんは、ちゃんとして見える他の子どもたちの思いも代弁している面もあると受けとめ、ユメ雄が夢中になるときはみんなが夢中になるときだろうと、そういう学習や活動をつくっていきたいと思ったという。ケンジに伺いをたてる場面も時々あり、二人の力関係も存在していた。

二人への指導方針として、努力やがんばりを認めてほめる、そしてみんなの前や学級通信で取りあげることにした。ユメ雄にはかまったり、触れたりしてスキンシップを強める。ユメ雄は初めは抵抗するが喜んで抱っこやおんぶをされており、宇宙船遊びを自分からせがんでくるようになる。また文字を丁寧に書くので授業中に紹介したり、好きな折り紙を生かした紙飛行機作りやランドセルの整理などで「お手本」として皆に示した。

図工の時間には地域の代表的な乗り物として「トラクター」を題材にして、学級のお父さんに頼んで持ち込んでもらう。ユメ雄の大好きなものなので機能についてあれこれみんなに解説をしてくれる。そして迫力満点のトラクターの絵を描く。

こうして9月半ばには職員室での話しの中で、他の先生方が「なんか、この頃ユメ雄が大人になってきたよね」「そうそう、物事がわかるようになってきたというか」と評価するまでになったという。

学習場面でも、国語の吹き出しの記入について自分の意見を述べ、友達がそれを受け入れることも起こった。生活科で収穫したメロンを分けるときにも、大きさの大小があり困っていたときに、ユメ雄の「家の人でメロンの好きな人が多かったら、大きいのを持っていけばいいじゃん」という一言で見事解決という場面もあった。

ユメ雄の母親とは連絡が取れないことが多かったが、朝は置いてあるパンやおにぎりを食べてきているようで、以前よりは改善されているようであった。10月の学芸会終了後に母親が感想を寄せてくれ、「…ここまで出来るようになったんだなって号泣でした。とっても自分の子どもに甘い評価しかできませんが、私にとってはうれしい学芸会でした」と書かれていた。

2年生になってからも「～忘れました」ということが度々あった。家庭との連絡などのファイルを見ると以前のものがそのままだったりしており、母親にもアドバイスをしして籠などを用意してそこに置いてやりとりをしてもらい、だいぶ改善されたがユメ雄一人の力では習慣化は難しかった。

9月には口の周りのただれがひどくなり、病院受診を勧め薬が処方され改善された。途中で服用をやめてまたひどくなり、母親と連絡を取り何とか学芸会の劇に間に合う。10月の個人面談では、腹が立ったときの自分の気持ちを説明できたのでそれを褒め、成功体験や自信をつけることがさらに必要だと感じたという。また、朝食を食べてこないことも多いことがわかる。

ユメ雄家族を支え見守るための関係機関のネットワークづくりが今後の課題であると結ばれた。

【報告3】 伊達市立稀府小学校 佐茂 厚美さん「学校文化づくりと子どもの成長」

佐茂さんの報告は4年連続である。「学力」テスト体制の中で指導主事が「教科書を教えるのではなく、教科書で教えるのだ」と言い始めた。「何を？」と問うと、「指導事項を」との答え。「体力テスト」体制でも同じようなことがあり、柔軟性や俊敏性を育てるのが大切な低学年にも筋力や体幹、心肺機能をテストしようとする。

こうした中で、子どもの表現力を育てることを大事にしている。子ども自身が、歌や、言葉や、文章や、さらには表情や、つぶやきなどで表現することを通して、自分の中にある心的状態や感じていることを外に表す。そういう力こそ育成しなければならない。子どもが何かを「演じる」のではなく、自分自身を表現するのである。「表現力の育成」は、単に教育における一つの分野ということにとどまらず、教育にかかわって深くそれを支え、他のあらゆる教育的な営みを肥沃にする役割を担っているのではないか。

佐茂さんは前任校の洞爺湖温泉小学校で、同僚とともにこうした考えに基づく実践(それは以前のこの分科会でも紹介された)を重ねることができ、稀府小でも継続できているという。

3年前には「力のある教材」についての問題提起があった。そして「子どもが大人に望んでいるものは、はっきりとしたよくわかる描写であって、子ども用の描写ではない」(ヴァルター・ベンヤミン)に学び「力のある教材」を選ぶための二つの基準を考え始めた。まず「和洋を問わず歌い継がれてきたスタンダードな曲」ということで、次に「旋律がすぐ思いつくような曲ではない」ことである。

今年は公開研究会は行わず、研修テーマも体制も新たなものになったが、学校長の提案で今年も全校合唱を続けることになった。議論して研修とは別に、全校合唱を担うチームを組織することになった。そこに昨年までの「チーム表現」のメンバーが3名入ったので、昨年までの実践を継承し、ドイツ民謡「あもみの木」(林光訳)と、斎藤喜博作詞・丸山亜季作曲「利根川の歌」を選曲した。今回は後者をビデオで鑑賞した。

毎年の学芸会で、全校合唱とともに「群読」にも取り組んできた。有名な詩をいくつか区切って各学年に割り振り、合間合間に全校の声を揃えるやり方だったが、「表現」についての理解が深まる中で、全校の息をあわせたものを考え、ソロ・アンサンブル・コーラスという3つに分けて行うことを基本としているという。「表現」の意味を考え直したという初参加者の声があった。

II 高校における実践

【報告4】 八雲高校 長野 喜美子さん

「学校生活で困り感を抱える生徒の対応－医療・福祉関係機関との連携から」

昨年は一人の生徒との関わりを詳しく報告していただいたが、今回はより多様な事例の紹介があった。生徒の確保のねらいもあって特別支援教育をやっていることを中学校等に

も伝えているという。現在は300名を越える生徒がいる。長野さんは養護教諭の仕事との兼務は無理と判断しコーディネーターはおりにいるという。この7年程で毎年3名前後の発達障害の診断を受けている生徒が在籍している。心身の不調による不登校傾向の生徒は以前よりも減少しているようである。以下、具体的な事例である。

1. 事例

A君—平成（以下略）21年入学。中学校では特別支援学級在籍。本人が寄宿舎生活を嫌がり自宅から通える本校を受験。入学式ではトイレから出られなくなり欠席が続いた。保健室登校が出来たがこだわりが強く、保護者・中学時代のコーディネーターとも情報共有をし、八雲養護学校のパートナーティーチャー制度を使ってアセスメントを実施し、生活年齢は4歳程度で幼稚園児が高校生生の集団に迷い込んでおろおろしている状況が本人の困り感であることがとらえられた。翌年2月に高等養護学校を受験し進路変更を果たし、生徒会副会長を務め、現在は就労支援施設に就職して自活している。

B君—22年入学。10月頃から不登校に。メンタルクリニックを受診しドクターと連携体制を取る。特別支援対象に認定し支援。スモールステップで別室登校し、2ヶ月程かけて完全授業復帰ができた。成績会議で補充を行い、2年に進級後も受診を続け卒業した。

C君—21年入学。対人関係が苦手で、クラスメイトとの折り合いが悪いと感じ、不安感を持っていた。2年生時にクラス担任とのコミュニケーションがうまくいかず、イライラ感を強め自覚の無いまま暴言を吐いたりした。保健室に相談のため来室。担任とも相談し保護者面談で受診を勧める。ドクターのアドバイスを本人も納得し、卒業まで通院しながら感情のコントロールをした。特別支援委員会でも「アスペルガー症候群」の特性を持つ生徒として、良いところを伸ばし認める対応を続け普通に生活できる状態を取り戻していった。そして道内の大学の法学部に合格した。

D君—22年入学。7月から12月まで不登校傾向で、ぎりぎりまで進級する。エネルギーや気力が少なく受診した方がよいと判断されるが、本人と両親が希望しない。2年生の7月学校祭後に不登校となり、うつ病と診断され長い経過を経て進級を果たす。3年生でも7月のプール学習（他人が入った後のプールに入れない）から不登校となり、プール学習を他の学習に切り替えるなどの支援を行ったが、50%を越える欠席を重ね転校することになる。少人数の通信制高校で無事卒業でき、今は大学に通っている。

E君—昨年度の分科会で報告された事例でありここでは省略するが、現在はB型就労支援施設に通いながら高校卒業程度認定試験を受験中であるという。

F君—22年入学。実の母と5人の兄妹と暮らす。母は家事能力、育児能力がなく、金銭管理もほとんどできず、彼はその中で昼食もなく大変な状況で暮らしていたことが2年の夏に明らかとなる。町の住民生活課を中心としたケース会議で支援策を検討。現在は函館市で仕事先が決まり、アパート生活で自立を図る。他のきょうだいも養護施設に入所予

定。

G君ー27年に地方の中学校から入学。母とアパートに住み通学中。中学では数学と英語を別室で学習支援を受けていた。知的発達障害と認定されている。人なつっこく、コミュニケーション能力もある程度あるが、人とかかわる上での距離感がとれずに苦戦している。携帯やラインのやりとりで、女子いきなり「つきあって下さい」と送ったりして、担任が指導したりしたが、クラスの女子からは「キモイ」「うざい」などと陰口を言われるようになる。9月に相談のため保健室に来室。「とても辛くて辞めたい」という。担任とも相談し、「相手との距離の取り方」という冊子をもとに、自分の行動を振り返り今後の異性への行動の距離の取り方を話した。

2. 医療機関・専門機関・研究会との連携

以上のように、様々な生徒が入学し、入学後にも不応適や困り感を抱える場合が多々ある。校内でのカンファレンスや指導では不十分なこともある。その場合に頼りになるのが専門家の存在である。上記の事例でお世話になった主な専門機関は、函館思春期メンタルサポート研究会、函館性と薬物を考える会、八雲町役場住民生活課（児童係）であった。

そして、時間をかけ一人ひとりに向き合ってチームで関わり「一番幸せな居場所」を考えていく。そのプロセスで「進路変更」になっていくことがある。願うのは、その変更先が本当に「一番幸せな居場所」となっていることである、と結ばれた。

【報告5】 北広島西高校 大澤 信哉さん 「M君との4年間」

昨年は「学校祭壁新聞コンクール」について報告された大澤さんが、今年は特別支援コーディネーターとしての活動についてレポートしてくれた。7年間数々の事案と関わってきて思うことは、彼らが自ら自分の道を歩み出すためには、それぞれにふさわしい①生活・学習環境があって ②サポーターがいて ③タイミング（時期）があるということだという。これは、報告4で長野さんが述べた視点と重なっている。私たちがよかれと思って行った支援が、かえって病状を悪化させるに至ったこともある。

ここで取り上げるM君は、本校を離れた現在明るく元気で将来への希望や意欲に満ちている。そして大澤さんや本校に感謝しているそうである。

普通科8クラスで全校生徒数は900名を越える大規模校である。札幌市内からの通学生が8割を超え、部活動や行事に困難性がある。内面的に穏やかな生徒が多く生活指導面での苦勞は少ないが、特別支援を必要とする傾向の生徒が年々増加しているという。8割強が大学・短大・専修学校等に進学し、2割弱が就職している。

2011（平成23）年度ー入学したM君はおとなしく口数が少なく、女性に対する嫌悪感をもち洗濯や部屋の掃除も母親に任せられない。幼少期に両親が離婚し、母親・祖父

母と暮らす。小学校高学年の時に祖父母が亡くなり、脅迫症状が出て通院する。中学校では環境が変わり心理的負担が大きかった。体臭がきっかけでいじめにあう。本人の祖母への暴言で祖母は別居。同世代とのコミュニケーションがとりづらい。

以上のことは学校祭の準備中の7月上旬に彼が突然「学校に行きたくない」と言って欠席した翌日に、母親と本人が来校して担任、学年主任とともに面談したさいに聞いたことである。教室で女子から「くさい」と言われたことが原因で教室に行くのが怖くなったという。今後の対応についても話した。

翌日の午前中、別室に登校し養護教諭と面談し、「いろんな先生に話せて楽になった。朝の人混みを避けると登校するのが楽」ということで、夏休みに入る前まで別室登校が続いた。状況を見て夏休み後も別室登校を継続。夏休み明けの定期試験は相談室で全科目を受ける。その後母子に特例委員会について説明し、修学の意志を確認し診断書を提出してもらい教育相談室の受け入れを決定する。各教科担任に学習の協力を依頼する。11月には保護者の了解のもと担当医を訪問。症状の改善を確認。3月の職員会議で特例措置での進級が認められる。

2012年度一進級し4月当初は教室に入ることに抵抗感が強く、教育相談室に登校し教科担任に相談室まで迎えに来てもらうことで途中から自ら教室に行けるようになる。席の位置も配慮し音楽や体育にも参加した。

5月までは順調に経過したが、再び強迫神経症が悪化し6月頃からはまったく登校できなくなった。母親の休みの日には一緒に来るが、校舎が見えると動けなくなる。大澤さんが近くの公園に行き、そこで1時間程対話することもたびたびあった。

担当医との懇談では「本人が頑張りすぎたのでしょう」との見解が示され、担当医には弱音を漏らしていたそうである。よかれと思って授業への参加や単位取得にこだわっていた自分の不見識を反省したとのことであるが、このあたりの評価は微妙であるように感じる。

結局この年度は単位取得もかなわず、翌年度から休学することになる。通信制やサポート校等への転学も提案したが、本人の強い希望で本校を卒業することをめざすためである。

2013年度一休学中は「札幌市若者支援総合センター」の協力を得て、「ポプラ若者活動センター」に通所できるようになった。当初は好きな本を持って行って読書をしている日が続いたが、3ヶ月後位から料理や自転車などの好きなことについて所員との会話ができるようになる。その後、半年以上かかったが他者とのコミュニケーションが徐々にとれるようになり自信を付け、本校2学年への復学の意志を表明する。14年2月に保護者・本人と面談し確認。その後担当医を訪問して復学後の留意点を相談する。

2014年度一復学にあたっては様々な準備をして臨んだ。教科担任だけでなく広く情報を共有した。新しい担任と大澤さんとの「ポプラ」に行き保護者や担当者とも面談し、外部との連携もスムーズに行くよう配慮した。

しかし、実際に登校できたのは2、3日であった。彼にとっても大きなショックだったと思われる。大澤さんは前記の反省から、全てを本人の意思に任せ、起こる事象の全てを

受けとめる姿勢で臨んだという。つまりきこそ、彼が自分の現状を自覚するためのプロセスなのだ。

「ポプラ」には通所でき、「ポプラ」主催のワークショップにすすんで参加したりと積極的に活動できるようになる。有朋高校から調理の道に進んだ成人女性との出会いも大きかったようだ。次年度は有朋高校通信制に転学し、卒業後調理学校を目指すことを決意する。「ポプラ」で再会した折のすがすがしい表情が印象的であったという。

5年目の今年（2015年度）－現在彼はスクーリングを休むことなく今年度の全単位取得に向けてがんばっている。心配されたレポート等の課題も「ポプラ」に助けてもらいながら欠かさず提出している。本人のあまりの変化に感嘆している。

最初に述べたように、自分の道を歩み出すためには彼自身のタイミング（時期）が重要だ。同僚によく尋ねられるのは「見通し」である。特に担任には「結果」が気になる。見通しが立たないことは不安であるが、成長にはその子どもに合った時間が必要で、それを待てる大人でいたいと心から思うと結ばれた。

【報告6】 網走桂陽高校 中島 太郎さん 「交流分析を用いた生徒対応の試みについて」

交流分析の一種であるPCM（Process Communication Model）を意識した部活動指導の試みである。PCMとはアメリカの臨床心理学者ケーラーによって開発されたものであり、自分を知り、相手を知ることによってミスコミュニケーションを回避し、良好なコミュニケーションと人間関係を構築していくことを目的としているという。すべての人が以下の6つのパーソナリティタイプを（複合的に、組みあわさって）持っており、各タイプにはよく使う言葉、得意とすること、動機づけとなるものがある。

6つのタイプは Thinker, Persister, Harmonizer, Imaginer, Reberu, Promoter である。ここでは実践で活用された2つのタイプの説明だけを紹介する。

Thinker タイプ－目的から逆算して考え、効率的・合理的に進める。自分にとって合理的なパターンや秩序を作る。計画立案や事前準備が得意。無表情で冷静に話し、質問が多い。

Harmonizer タイプ－自分のことよりも相手のことを優先する。何よりも家族や友人との人間関係を大事にする。雰囲気、環境、居心地に敏感で、それらを大切にする。柔らかみのある微笑を浮かべ、ソフトな話し方をする。

以上の考えを担当の文化部の指導に生かした。部員数22名、全道コンクールで5年連続で奨励賞を獲得するなど、まずまず活発な活動をしている。入部動機は消極的なものが多く、ほぼ全員が自称「コミュ障」。人間関係構築が苦手である。

その中で部長と部員Aとのトラブルが起こる。部活動を休みがちなA。それに対し「週4日は出席するというルールなのだから休んではいけない。それでも休むのであれば部をやめろ！」と詰問する部長。泣き出すA。困り果てる部長。

中島さんは部長に次のような声かけをする。「人は性格が違う。このように話しかけられたら、よく理解できると思う。(以下、Thinkerタイプを意識した声かけ)」それに対して部長は同意。「しかし、こんな風に話しかけられたら、どう思う。(以下 Harmonizer タイプを意識した声かけ)」それに対して部長は「気持ち悪いです」。その直後に部長に行った Harmonizer タイプの声かけを部員Bに対して行う。Bは「わあ、嬉しいです。にこりんぼうさんです」。

中島さんは再び部長に話す。「このように、人によってかけられて嬉しい、嬉しくない声かけは違うのだから、Aに対して話しかけるには一工夫いるよな」と。そして、先ず理由を聞き、「待っているよ」といったAを必要としている趣旨のコメントをすることを提案した。

その後、週3回ペースではあるがAは部活動に参加するようになったという。心理的な技法もうまく活用すると、生徒間のトラブルをこじらせないで済むことができると、興味深く伺った。

まとめにかえて

今年度は以上のように、困り感を抱えたり特別な支援や対応が必要な子どもや青年に対する実践の報告が中心であった。そして、チームで関わり他機関や医師との連携をとることの重要性が明確となった。また、特に青年期の段階では長期的な視点で関わりながら、本人の意思決定を待つ姿勢が必要であることも共通理解となったと思われる。

保護者の生活が困難な場合に学校で（特に小学校で）朝食の対応をすることの是非も問題となった。最近ある新聞の投書欄で論争のような形があったが、多忙な教師にその役割を求めるのではなく、必要な人材を整備して簡単なものでよいので提供することを願いたい。下手な「学力対策」より余程効果があると私は考える。

また、昨年度は専門学校教員の方からの報告があったが、今後は高校以上の教育機関と就労を含めた社会とのつながりの中で、青年の自立についてより広い視点で深めていくことが大きな課題である。

「表現」の意味について考えさせられたという感想が多く聞かれたが、ますます強まる「学テ」体制とも言える状況の中で、意味のある学びや体験をどう保障していくのかを本分科会で一層深めていきたいものである。